定価一部100円
第314号　昭和46年8月10日発行（毎月10日発行）

昭和46年（1971年）
8月号（No. 314）
社団法人 日本山岳会
（J. A. C.）

目　次

本文
W・ウエストン師像の由来…… 1
アンナプルナⅡ峰の事故…… 2
厳冬期西穂高岳の記録…… 3
海外通信
ヒンズー・クシュ便り・松商短大… 4
石川支部1…… 4
石川支部2…… 4
静岡登攀クラブ…… 4
カラコルム便り…… 6
カトマンズから…… 6
ナガールコットの展望…… 4
A.C 名誉会員に槇，松方氏…… 6
マウント・クックに登る…… 7
会員通信
ロッキーから…… 8
浅草岳…… 8
会務報告
7月理事評議員会…… 8
図書室便り…… 8
学生部便り…… 9
指導委員会本年度計画…… 9
昭和46年度各委員会名簿…… 9
行方不明の会員……10
日高氏にネパール文化勲章……10
ルーム日誌……10
会員異動……10
その他
会員名簿作製に御協力を…… 1
山岳索引頒布……11

W・ウエストン師像の由来

槇　有恒

去る六月六日、ウエストン祭が上高地の碑前で盛大に行われた。これは昭和二十一年に再建されてから二十五周年記念の行事である。その折私はこのレリーフの由来を述べたのであった。

昭和十二年ロンドンに在住のウエストン師に対し多年に亘りわが国登山界に尽された功績により勲四等瑞宝章が贈られた。この叙勲を機会に日本山岳会は師の功績を永く記念するため建碑の案が生れ師に縁の深い上高地にレリーフを建てることなった。その頃、師と親しく面識のあったのは松方三郎君と私とであったが、この二人の印象を参考に松方君の所蔵する写真を本に佐藤久一朗君に制作を依頼することになった。制作者として同君を得たことは其後長く同君の物心両面に少からず迷惑をかけることになったが、同君の彫塑については既に世の高く評価するところであり、また制作について遠慮なく意見の交渉ができる点でもこのうえもない仕合せであった。

この会の決定に基いて同年六月二十三日黒田孝雄、佐藤久一朗両君と私は松本市に至り、市役所、松本営林署、国立公園協会松本支部等の各所を訪ねレリーフ建設の趣旨を述べたのであるが何れも快く承諾せられたのみならず建設地点の選択も私たちに一任されたのであった。この好意ある了解を得て三名は上高地に入り清水屋に宿をとった。私たちは積石などによる人工的な構造を避け、できるなら河童橋を中心とした上下の道沿いの露出している自然のままの基盤岩にしたいと考えた。始め小梨平を上へ過ぎて右手からの小渓流にかかる橋の側の岩面をも考えたが道に近か過ぎるのが思わしくなかった。次に清水屋から僅か上流のその頃梓川の本流が道近くを洗っていた山裾に立派な基盤岩の露出面を発見この地点を決定した。

同年八月二十六日、佐藤君と私は完成したレリーフを携えて松本に至り石工を雇い連れ立って上高地に入り右の岩面に三日間で取り付けた。夏も終りとて訪う人も稀れで、三日間に私たちの前を過ぎたのは外人と日本人との二人連れ一組だけであった。静かに晴れた谷に石を穿つ槌音だけが響いて長閑に仕事を楽しみながら終った。この日の印象を私はウエストン師に後日報告したが、たいへんに喜ばれたのであった。師は昭和十五年七十九歳で亡くなられたが、このレリーフ撤去の事態は戦争の進展と共に金属類の供出にからんで問題発生前に昭和十九年、一応山岳会ルームまで持ち帰っておいた方が適当だろうとの意見で茨木猪之吉、田辺主計、交野武一の三君によって上高地の岩面から取り外し持ち帰り虎の門、富士屋ビル内の山岳会ルームに保管した。

しかしレリーフは戦災による同ビル焼失と共に大きな損傷を受け一部分は熔け、板は歪んでしまった。この傷んだレリーフを佐藤君が苦心を重ね、原形に近く補修したものを昭和二十一年松方三郎、堀田弥一、浜野正男、林和夫、谷口現吉、佐藤其他の諸君によって上高地の旧地点に再建された。

その後暫くの間、碑の説明は松方君によって木板に書かれたものが添えられてあったが昭和二十六年松本市の好意によって真鍮板のものが作られ、成瀬岩雄、中屋健式、佐藤の三君によって取り替えられた。其後制作者たる佐藤君は毀損したものをそのままにすることを潔しとせず、新らしく制作し昭和四十年六月旧像に替えられたのである。同君の話では碑前の河原は整理され広場も設けられたので新らしいレリーフは旧像の約二倍の大きさにしたとのことである。以上が記念祭に報告した私の話の大要である。

なお、この建碑は、当初より高山忠四朗、小里頼忠両君をはじめ信濃支部各位の多大の協力と援助とにより円滑に進捗したるのみならず、累年の祭典の盛況も諸兄に負うところ多大なるを思い感謝にたえない。

会員名簿作製に御協力下さい

すでに往復はがきでお願いしたように、目下坂下理事を中心に新しい会員名簿を作製しています。十二月の年次晩餐会までに間に合わせようと頑張っていますが、はがきの回答がない方がまだかなりおられます。せっかくます目の原稿を印刷してあるのに、そこに書かず、書きにくい用紙だとか何とか文句だけいってこられる方もおり、また索引を送れだの、いろいろ注文される方もあります。しかしこのカードは事務連絡とは別に作業しておりますから、会への御注文はまた別にしていただくようお願いいたします。

御回答のない方はあるいは名簿から洩れる場合もあると思いますので、お含み置き下さい。とにかく名簿作りは全く大変な仕事です。会員各位の御協力を御願いする次第です。（山崎）

第二七六回小集会のお知らせ

第二七六回小集会は九月十五日（日曜日）川苔山の日帰り登山を行ないます。

当日は立川駅青梅線ホーム奥多摩寄りに午前七時半までに御参集下さい。

持参品は昼食、雨具、懐中電灯、セーター、軍手、水筒、地図（秩父、五日市）参加希望者はあらかじめ本会事務局まで申し込んで下さい。

アンナプルナII峰の事故

信大遠征隊　西郡光昭

信州大学ネパール・ヒマラヤ遠征隊はアンナプルナ二峰（七九三七m）登山中佐藤正敏隊員が転落死亡するアクシデントを起こした。ここに行動概要および遭難事故について取りまとめ報告する。

▽遠征隊氏名（隊長）西郡光昭・三十一歳医師（副隊長）片岡格・三十五歳（隊員）堀勝彦・三十六歳、森田稲吉郎・三十歳、松尾武久・二十九歳、宮崎敏孝・二十八歳、岡村知彦・二十八歳、扇能清・二十三歳、山下泰弘・二十三歳、佐藤正敏・二十二歳、市野和雄・二十一歳。

行動概要

四十六年一月十六日、隊荷横浜発。

二月八日、先発二名（松尾、佐藤）羽田発。

二月九日、先発二名（東パキスタンダッカ経由）カトマンズ着。

二月十二日、続発三名（西郡、扇能山下）羽田発。

二月十三日、東パ経由、カトマンズ着。

二月十四日、松尾、佐藤カルカッタへ（カルカッタ隊荷通関インド国内陸送）。

二月十九日、後発六名（片岡、堀、森田、宮崎、岡村、市野）羽田発。

二月二十日、東パ経由、カトマンズ着。

三月十一日、全隊員、現地雇用人夫空路ポカラ集結、隊荷ノータンワ、バイワラ経由陸路ポカラ着。

三月十四日、偵察隊、ポカラ発キャラバン開始、ポーター十一名。

三月十六日、本隊ポカラ発キャラバン開始、ポーター百四十一名、キャラバン・ルート＝ポカラより東進しマルシャンディ河に入り、これを溯行、ベースキャンプまで十一日。

三月三十五日、ピサン村にて本隊、偵察隊合流。

三月二十六日、ピサン村より、サラタン谷を溯行約三Km、標高三五〇〇m地点にBC建設。

三月二十八日、登山開始、登山ルート＝サラタン谷源流の氷河からアンナプルナ二峰（七九三七m）北西壁経由とする。

三月三十日、C1建設、標高四五〇〇m。

四月三日、C2、標高五三〇〇m。

四月二十八日、C3、標高六三〇〇m、C3建設に至る間、雪崩によって予定ルートの変更を余儀なくされたこと。十日間悪天候が続いたことによって予想以上の日数をついやす。

五月一日、C4、標高六六〇〇m。

五月三日、C5、標高七三〇〇m。

五月四日、隊員佐藤正敏およびサーダー、ギルミ・ドルジェ頂上を目指しC5発、標高七八〇〇mまで到達、登頂果さず下山途中、標高七三〇〇m地点にて疲労の極に達したため、サーダーは佐藤の身体をロープにて固定し、現場にて待機するよう伝えC5に救援を求める。C5に待機中の松尾隊員およびシェルパ、ペンバ・ノルブ、急を聞き現地に急行せるも佐藤の姿なく、滑落行方不明と推定された。滑落推定時刻午後十時十五分〜三十分。

五月五日、松尾、シェルパ、ペンバ・ノルブによって現地捜索が行なわれたが滑落の形跡認められるも遺体確認出来ず、佐藤行方不明なるも事実上死亡したものと判断、加えて捜索続行不可能と判断して当日午後より上部キャンプ撤収開始。

五月十日、全員BC集結。

五月十三日、BC撤収、帰路キャラバン開始（ポーター七十五名）。

五月二十一日、ポカラ帰着。

遭難に関する経過

五月四日、隊員佐藤正敏、サーダーギルミ・ドルジェ、登頂メンバーとして午前六時十五分C5発、アンナプルナ二峰頂上に至る西稜をたどり、午後三時標高七八〇〇m地点に到達。しかし強風、寒気加わり、当日中の登頂は可能性少ないため、登行継続を断念するよう隊長より指示があり、C5に向け下降を開始する（午後三時三十分）。

この帰途、佐藤の疲労、体力消耗激しく、歩行継続きわめて困難となり、二回にわたり雪面を滑落した。幸いにも安全確保のため、ロープを結んでいたサーダーの停止によってことなきを得た。これ以上の下降継続はきわめて危険性大と判断したサーダーは標高七三〇〇m地点、稜線上の雪面に小テラスを作り、ピッケルを雪面に十分深く打ち込んで、佐藤の身体をロープで結び固定し、若干の食糧を残し、救援隊の到着まで待つよう伝えて救援を求めるべく単身C5に向け下降。疲労困ぱいしながらたどり着いた。

以後の経過については救援および現場捜索にあたった松尾隊員の報告にゆずるが、松尾の捜索結果およびサーダーの報告から断判して、佐藤は自力で行動せんとしロープを解き、誤って滑落したものと考えられ、滑落地点より下部平坦地までの落差（千三百m）も考えあわせ、行方不明とはいえ、死亡したものと判断せざるを得ない。

救助活動と捜索について

松尾武久

遭難当日一九七一年五月四日、松尾は第二次登頂隊員ならびに第一次登頂隊支援の任を帯びシェルパ、ペンバ・ノルブとともにC4よりC5に登り待機した。

五月四日、快晴、一時曇り、風強し

15・30　佐藤隊員より引き返すとのトランシーバーによる連絡あり。

17・00　登頂隊出迎えのためC5を両名にて出発。

18・00　見通しの比較的良好な稜線にて二名の影を求めるも確認出来ず。ガス時々去来、風強し。

19・00　登頂隊二名と会えぬままC5帰着。

21・22　サーダー、ギルミ・ドルジェ単身C5に帰着。疲労激しく、口もきけず、辛うじてC5近くの鞍部に小テラスを作り、ロープとピッケルで佐藤を固定しえたとの報告あり。

22・00　松尾、ノルブが救援のためC5発、尾根を曲った地点から、現場付近に佐藤のものと思われるヘッド・ランプのライトを確認す。

22・57　現場着、サーダーの報告通り、小テラスは確認出来たが、佐藤の姿なし。テラス上にテラス下端より滑落の形跡が認められた。オーバー手袋一対、軍手一対、耳あて一、罐詰（果物）が残っているだけであった。隊長よりC5への帰着を命じられて帰着。

23・52　C5帰着。

五月五日、快晴、風強し。

8・00　捜索および現場確認のためC5発、C5より滑落地点小テラスまでの距離二百mであった。

8・30　小テラス着、このテラスから谷側に向かう滑落の跡を確認、マディ・コーラ源流（佐藤が滑落したと思われる谷）の氷河部分を上部より偵察したが遺体は確認出来なかった。現場は傾斜20〜30度の雪で、氷の部分は認められないが、同斜度にて標高七三〇〇mより同六〇〇〇mまで続いている。現場の状況はサーダーの報告通りであり、松尾は現場付近の写真撮影を行なったが、シャッター凍結のため撮影は不可能であった。

10・00　隊長の指示によりC5へ帰着。

14・00　C5撤収、緊急に下部キャンプへ下る。

〔編者付記〕本稿は「信大ネパール・ヒマラヤ遠征隊行動概要および遭難事故報告」からの抜すいである。

ヨーデルを聴く会　吉祥寺の今井嘉道会員邸で九月四日（土）夜開きます。今井邸の敷地が道路でけずられるため今度が最後になります。こんもりしたお庭で、月を眺めながら聞くヨーデルは素敵です。希望者は八月二十五日まで本会ルームへ。

山岳保険に入りましょう!!
●貯蓄にもなります。
●万一の場合にはひとの迷惑を軽減します。
御相談は　日本団体生命　へ
角筈支部（専門取扱営業所）
東京都新宿区角筈1の844　新光ビル内
電話（352）1556・1557

——登山史の発掘——

厳冬期の西穂高岳の記録

山崎安治

登山史を研究すると、ひとくちにいってもこれほどやっかいな仕事はない。必要とする登山の記録の確認がむずかしいからである。明治以前の登山記録といった古いものならまだしも昭和以降の近代登山の記録でも一般に発表されていないものがたいへん多い。

農大山岳部による厳冬期の西穂高岳初登頂の記録を調べるのも、かなりまわり道をしなければならなかった。厳冬の西穂高が昭和三年一月農大隊によって登られたということのアウトラインは、藤田信道氏がその著「積雪期登山」(昭和八年刊)の中の「乾燥雪崩」という論文の中で「昭和三年一月、農大山岳部の先輩石塚氏が西穂高岳に岳川より登ったときにも、岳川谷の天候に起因するより速かなる雪の湿潤化を利用されて西穂高のクーロアールにあった湿潤雪崩のデブリを登っている」という僅か数行の記事によって承知していた。

農大山岳部の部報「ダス・ネーベルメーヤ」創刊号は、昭和六年十二月に発行されているが、これには「石塚氏の記録として一九二八年一月の西穂高初登攀を載せたかったが、同原稿が間に合わなかったため、一九二七年四月の『春の前穂高岳と明神岳の登攀』をとることにした」とあり、西穂高の記録は出ていない。OBで日本山岳会の評議員をされている織内信彦氏にお質ねしたところ、案内は中畠政太郎でこの記録は、そのころ雑誌「文芸春秋」に石塚氏がたしか書かれているはずであるとのご返事であった。ただ何号だかむろん不明であるとのこと。文春には知りあいもいるので、ひまを見つけて同社の資料室に出かけようとは思っていたが、なかなかひまがない。

たまたま神田の古書会館の何かの古書展のとき、ふと眼についたのが「文芸春秋三十五年史稿」という同社の社史であった。手にとってみると、創刊号からの目次が、そのままずらりと出ている。昭和三年の項をずっと追って行くとあった、あった。昭和三年三月号(第六年第三号)のスポーツセクションというところに「西穂高岳スキー登山……石塚照夫」とあるではないか。これ、これとばかりノートにメモしたことはいうまでもないが、さて現物を見なければ話にならない。幸い日本山岳会図書担当理事の野上成勇氏は国会図書館にお勤めである。きいてみると文春のバックナンバーは全部そろっているというのですぐそのコピーを取っていただいた。

同書一三一ページから一三三ページにわたって厳冬期の西穂高の記録がくわしく報告されている。昭和三年一月七日横尾谷に向かう慶大隊と前後して上高地に到着、五千尺旅館前の林の中の小舎にはいり、一月八日は焼岳に遊び、翌一月九日西穂高沢からの西穂高岳登頂に成功した。以下はその日の紀行である。

「火にはじかれる薪の音に眼をさませば人夫は朝飯の用意にいそがしい。ラテルネのローソクの光が無心に動くブナの木の燃え上る焔と共になつかしい。午前六時上高地が明け放つ前スキーをつけて梓川に沿うて上る。無口で進む黒影は三個、暁の寒さは毛手袋三枚をも通して痛む。きょうは西穂高の山稜にピッケルを打ちふり、クランポンの叫びを聞き、ザイルを繰つるのである。とりえのない気持が脳裏にきらめく。美しいモルゲンロートに輝く穂高、そして昨夜からの樹氷も次第に消えてゆく。岳川谷へと森林の中をスキーはすべる。静かな朝の空気に漂う木々の精、絶えず流れている梓川のせせらぎ。山男たちにとってなくてはならぬものである。

森林帯を出てから雪はかなり深く、西穂高登路の下までは、小屋から二時間半も要した。ここをスキーデポットとして、まず輪かんじきにはきかえる。それはスキー使用者がただ二人のみにてジクザクに上る時間の空費を考慮してのことである。人夫Nを先頭に夏のガレを登る。上層雪崩の落ちた上は雪はしまって比較的楽である。しかしきょうは、二、三日前からの天候の具合で雪崩の落下するの心配さえもない。一回目の食物をとり、尾根まではただ上り一方、雪も軟質になったが膝の上くらいまでが最も深く、それでも人夫だけはずいぶんつらいらしい。

二回目の食物をとってから傾斜も急になりガレが山稜近く二分する地点より右方を登り午後二時山稜に登り着く。信州側三間ほど下で風をよけ、輪かんじきをクランポンにはきかえる。アンザイレンした三人はN、H、Iの順で吹きまくる氷滴と戦ってハッケンを行ない、連続登攀で午後二時半すぎ西穂高岳の頂にたどり着いた。長い間の憧憬であった氷頂に突き刺された三本のピッケルも、傾きかけた冬の陽にきらめいている。ただ一枚の写真をやっととり、ひとみを四方に転ずる。近く笠、槍、薬師、遠く富士、赤石が望まれる。三角点標柱に付着せる雪は面白いかっこうである。

頂を逃げるように辞し、尾根を下ってクランポンをとる。凍った紐は全部切りはなし、感覚のなくなった手で輪かんじきをうがって直ちに下る。チョコレートをかじり、陽がかげってより寒くなった中をスキーデポットまで一気に下る。スキーにはきかえてから空腹にスイートポテトをつめ込む。軽くすべり出すスキーも次第に早く、いくどか豪壮な転倒をする。森林の中を走り下る。淡く暮れてかえりみれば穂高に夕映は終わり、最後の息を引き取る太陽の心細き雲への反射、マドロスから昇る紫煙も大空にとけ込んでゆく。山に戻るウサギに驚ろかされ、小屋に戻ったのは六時近かった。うす暗いランプの光の下に爺さんの笑顔がうかがわれる。

一杯のブドー酒、凍った罐詰の味も下界では想像だけである。なすべきことをなしおえた気軽さは、ゆるみかけた心にもわかるけれども幾分かの興奮に夜は早く寝つかれない。」

一月十一日まで悪天候のため滞在し十二日徳本峠越えで下山した。

私は早速この記録の発見を織内氏に報告し文中Nとあるのは案内の中畠政太郎、Hとあるのは林二郎氏、Iはリーダーの石塚照雄氏(夫は誤り)である旨ご返事をいただいた。また上高地の小屋というのは、昭和三年まで農大山岳部が五千尺から借り、ベースとして使用していたもので、五千尺の前の梓川べりの林の中にあったとのことであった。

積雪期の穂高は、このころちょうど春期における初登頂がひとわたり終わって、さらに困難な厳冬期の登頂が当時の第一線の登山者によって最大の課題とされていた。その先端を切って活躍していたのが慶大であり、さらに早大がこれに続いていたが、こうした学生登山者に伍して農大の活躍も注目されるものがあった。その最も大きな成果がこの厳冬期西穂高初登頂となったのであるが、たまたま昭和三年一月九日には、また同じ日本郷常幸氏をリーダーとする慶大パーティが、横尾岩小舎から北尾根を登り、前穂高登頂に成功している。天候の状態によったのであろうが奇しくも同日厳冬の西穂と前穂が極められ、穂高岳の登山史上に貴重な一ページが加えられたのである。

私はその後古書展に行くたびに文春の古いバックナンバーに眼をつけていたが、やっとその原本である昭和三年三月号を手にすることが出来た。内容は「無産政党座談会」「井上侯暗殺事件の真相」など当時の世相を物語っている。ちょうど昭和四十三年十二月六日の日本山岳会の年次晩餐会の日のことで、「この一本展」にそっと並べておいたら、織内氏が素早く眼に止め、よく探されましたね、といわれた。

原稿募集 会員通信、随想、研究など会報原稿を募集します。

☆会報製本御引受け☆
製本代 (251号〜300号) 金700円也
送料 別受け 金120円也
ナカバヤシ株式会社
東京店・文京区水道2〜15, 電話(943)0311(代表)
大阪店・都島区相生町7, 電話(352)3491(代表)
名古屋店・昭和区雪見町1〜15, 電話(731)7331(代表)
工場:大阪工場(堺市), 東京工場(戸田町)
▶背文字その他については往復はがきで
日本山岳会内「会報委員会」に御相談下さい◀

海外通信 1971

『ヒンズー・クシュ便り』

I

松商短大　樫原正勝

（ノシャック対面ルート）

今この眼でティリッチ・ミールを見ています。日本を離れて早や三週間、インド、アフガンを経由してカイバル峠から陸路パキスタンに入りました。

パキスタンに入っての第一印象は人間がトゲトゲしい感じと、そして暑いというところです。

ピンディで簡単に外務省関係の手続きを済ませ、ピンディ、ディール、チトラルと陸路二トンの荷を運びました。

今、時計は朝七時半を指しています。初めてみる七〇〇〇m、そしてヒンズークシュの山、さすがに心踊る気持ちは隠せません。

これからクラーまでジープ、そしてアトラック氷河へとキャラバンを進めます。隊員は皆元気です。またBCからお便り致します。お元気で。

松商HKE
c/o Shahzada Burhan-UD-
Dinkhan, Doromuts, Chiral,
Chitral State, West-
Pakistan.

（吉沢宛）

IIの1

石川支部　津田文夫

（ティリッチ・ミール）

拝啓、ご無沙汰しておりますが、お元気のことと存じます。

小生よんどころなき事情により遂に登山隊に参加する破目となり五月二五日本隊より一週間遅れて羽田を発ちました。余り突然のこととてご挨拶をいたしそびれ申訳けなく思っています。

五月二八日、日本大使館のつきそいで外務省（イスラマバード）で担当官より注意あり、連絡官のムハマッド・ディン大尉と会いました。（カラチでは入国の際はスムーズにボンと三カ月の入国サインをくれ、税関もフリーパスでしたが、国内線に乗り換える時、荷物の中味を底まで調べ、身体検査までされる厳重な何層もの検査あり、ピッケルもカメラもラワルピンディに到着したら返すと、取上げられました。

私達のあとからソ連隊が入るとか（ルートは教えてくれませんでしたが）で、七月二五日までの登山期間が更につまり、七月二五日、アルカリを発つことに決められました。

天候状態悪く、六月一日陸路でディールに向い、ディール着六月二日、トラックの上乗りをしてチトラル着。

最近ロワライ・パスは開通した様子でまだ途中は雪を切り開いていました。もう二度とやるまいと思ったロワライ峠越えを、しかも二度もトラックで（更に一度はジープで）したのは私ぐらいではないかと変な自慢をしています。

六月四日、荷物を順次一台のジープのピストン輸送でショゴットまで送りわれわれは明日ショゴットへ向う予定です。

あとはインシアラー（神の御心のままに）の文句通り、登山期間の変更及び人員の変更不許可により、人員の減少も加えて事態は大変困難ですが、とに角頑張ってみるつもりです。

私達のあとから直ぐに松商隊、イタリア隊等々が同時にチトラル入りするのではないかと思います。

では蛇足が多くて失礼ですが、とりあえずご報告まで。

チトラル、シャーザダ邸、レストハウスにて、六月四日

（吉沢宛）

IIの2

石川支部　津田文夫

ご無沙汰しておりますがご元気のことと存じます。私達は六月一〇日ディルゴンのBCを建設以後、高度順化と偵察を兼ねて、ディルゴル前衛峰のマルギリゾムよりのコルその他へ登ったり、アイスフォールのルート工作をやっていました。

しかし例のティリッチ・ミール南西稜は上部アスイカンテ付近の絶え間ない雪崩と、右肩の懸垂氷河よりのブロック崩壊が、C2、C3予定地点を洗うため、遂にこのルートを断念するに至りました。

引続きサウス氷河峰の南稜（仮称）へ突き上げる雪渓にルートの可能性を見出し、六月一九日、氷瀑を越えて南稜下にC1を建設、本日（二〇日）稜線上のC2建設（予定地の確認）を行なう予定です。

なお、申し遅れましたが、私達のC1付近で、オーストリア製のテントのペグを見つけました。多分昨年の隊のものと思われますが、もしかしたら67年か68年に入った隊のものかと思い一応お知らせいたします。

本日メイルランナーが出るとのことなので取りあえずご報告まで。

ディルゴルBCにて　六月二〇日

追記、私達のあとにソ連隊がティリッチ・ミールへ登る（別ルートの様子）とかで、登山期間はアルカリを発つのが七月二五日と期限を更にせばめられ、苦しいところです。

（吉沢宛）

なお、津田君の奥さんからの情報によると、二週間位前から他のルートでティリッチ・ミールをやっている隊が一つあるとのことである。

III

静岡登攀クラブ　秋山礼佑

（サラグラール南壁）

東京ももうそろそろ暑くなる頃と思いますが、相変らずお元気のことと存じます。

小生達の静岡登攀クラブ一九七一年HK登山隊は、こちらへ参りましてから二名の隊員追加申請をいたしましたが、幸いなるかな通常の約一週間（他の隊の進行状況に比べて）程のロス・タイムをしただけで、異例の許可が出ました。

今年外国隊を含めて約30隊がこちらへ参ったようですが、そのうちでメンバー・チェンジが認められたのはわが隊だけだということです。

曾野大使は全く不可能だからこれは無理というものだ、と随分そっ気なかったのですが、PIAが全面的に協力してくれて大いに助かりました。その点では小生の判断にほぼ狂いがなかったようです。

どうも決定のメカニズムが極めず最後まであやふやなこちらの外務省の態度にすっかり翻弄されましたが、今年はGHQあたりより外務省に一本化された窓口がものを言っていたようです。

しかしこの国のことですからまた来年はどうなるかわかりません。

（6頁に続く）

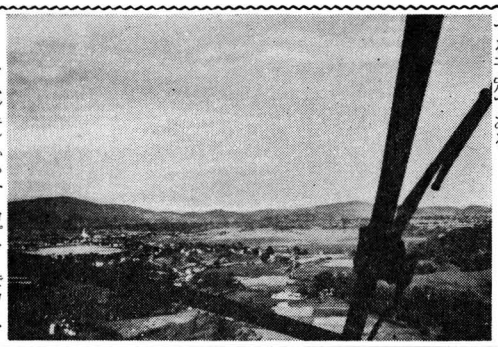
◇ナガールコットの展望◇

左図はネパールの観光協会から出しているリーフレットにあったもので、カトマンズを訪れたり、飛行機からヒマラヤが見えたりする時の参考までに借用してお眼にかけることにした。どんな山が見えるか、これで大体の見当はつけられると思う。

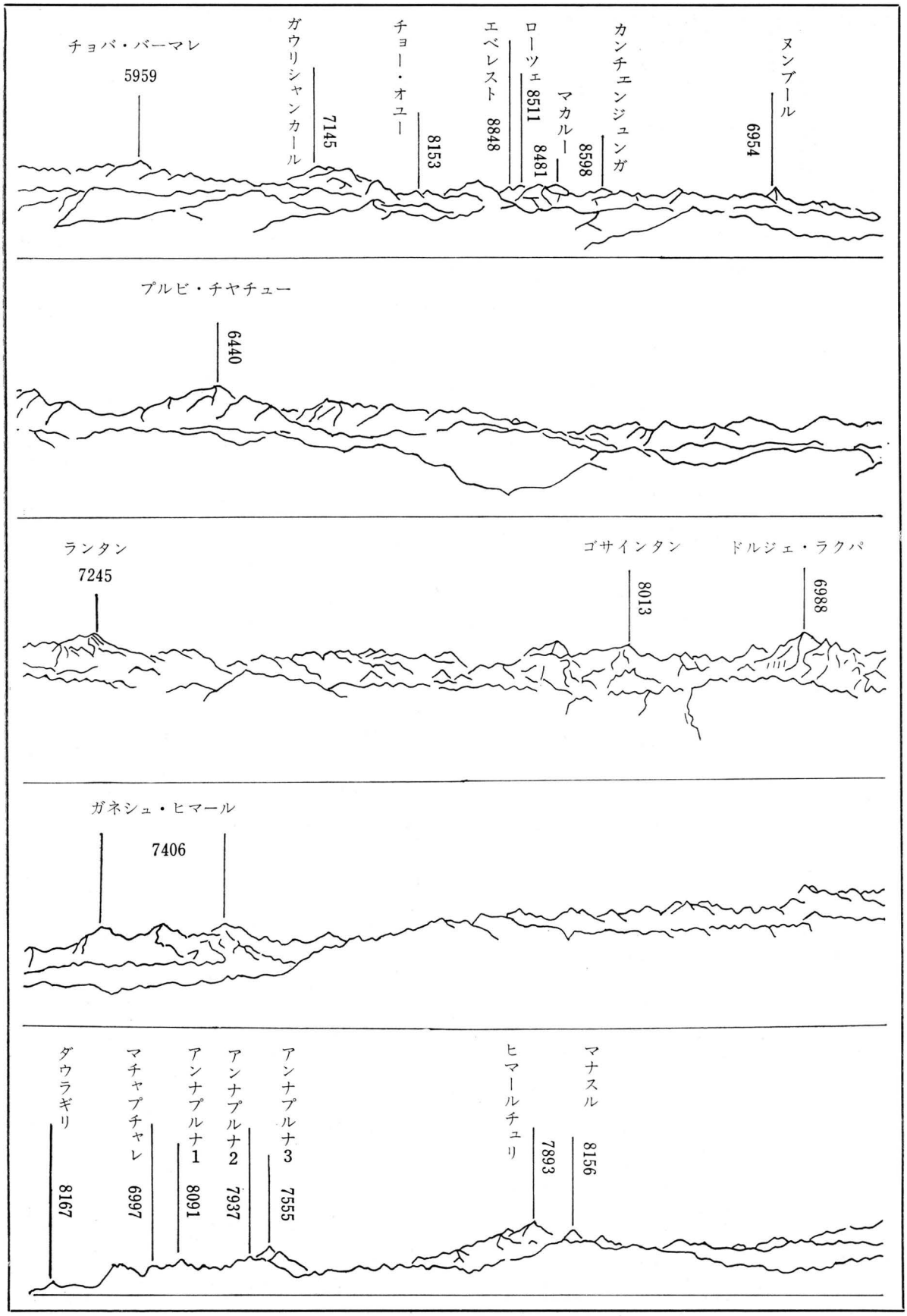
ナガールコットは海抜二一七六mの丘で、バドガオンの向う、カトマンズ盆地の東にあり、車で行けば簡単である。ここから東部ヒマラヤを見るにはやはり大気の澄んだ一〇月から三月の頃までがよい。エベレスト・ロッジというのが丘の上に立っていて、食事その他のサービスをしてくれる。

カトマンズ近傍の展望台としてはこの他に、ダマン、カカニ、ドウリケルなどというところもある。

次号にはダマンからの展望図を紹介する予定である。



クムジュンからヘリコプターでカトマンズへ戻った日、不時着寸前に撮ったもの。白いスワヤンブナートの上にナガールコットの山が見える。（吉沢）


チョバ・バーマレ
5959
ガウリシャンカール
7145
チョー・オユー
8153
エベレスト 8848
ローツェ 8511
マカルー 8481
カンチェンジュンガ
8598
ヌンブール
6954
プルビ・チヤチュー
6440
ランタン
7245
ゴサインタン
8013
ドルジェ・ラクパ
6988
ガネシュ・ヒマール
7406
ダウラギリ
8167
マチャプチャレ
6997
アンナプルナ1
8091
アンナプルナ2
7937
アンナプルナ3
7555
ヒマールチュリ
7893
マナスル
8156

Honorary Members of the Alpine Club

当会の名誉会員と、今さらにご紹介の必要もない槇有恒氏と松方三郎氏が、この度英国山岳会（AC）の名誉会員に推薦された。これは両氏にとってもわれわれにとっても大変嬉しいことである。

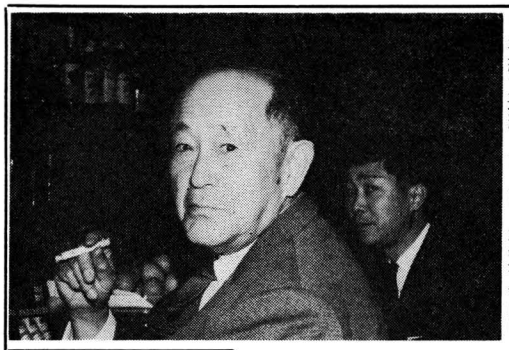
実をいうと英国山岳会の名誉秘書（平たく言えば無給事務局長のことか）マイク・ウェストマコットから最初にこのことで手紙が私あてに来たのは昨年の二月八日付のものであった。これはまだ厳秘でしかも非常に微妙な問題であるがあなたの御助言を頂きたい、という書き出しであった。

これには槇（以前会員であった）松方（現会員）両氏の名前もあげてあったので私は早速槇さんに連絡してこの旨を伝えた。勿論松方氏にも手紙で連絡した。向うが名誉会員にしたいと言っても御本人方が承知しなければダメだからである。

二回目にマイクから来た手紙には、近いうちに御両所に会長のエバンズから手紙を出すが槇さんはユウコウ・マキと書くよりユキオ・ミタと書く方が正しいのかと書いてあった。ACのお偉方の中に博識者がいて、両者が同じだと主張したのだそうだ。

私はこれに対し日本語の講釈まで長々と書いてやらねばならなかったが、マイクからはとんだ間違いをやらずに済み御厚礼申上げるという返事がきたところで今年の一月二十二日付で槇さんから私に来信あり。

……さて昨秋お話のありましたAC会長エ卿より愚生を同会名誉会員に推薦したき旨別写来信がありました。よろこんでお受けする旨返事いたしました。いろいろお打合にご尽力下さったことありがたく御礼申し上げます。……



（右）名誉会員、松方三郎さん、七二歳、明治三二年（一八九九年）八月一日生れ。写真はこの三月一四日に同氏宅で吉沢が撮影。

（上）名誉会員、槇有恒さん、七七歳明治二七年（一八九四年）二月五日生れ。この写真は今年の総会（424）の時のもの、右に小方全弘君。

エバンズ会長からのもの次の通り。

15th December, 1970

Dear Mr. Maki,

I am glad to be able to tell you that the Alpine Club has decided to offer you Honorary Membership of the Club, in recognition of your contributions to mountaineering over many years.

We very much hope that you will accept this offer, and will honour the Club by joining it,

Yours sincerely,

Charles Evans

Sir Charles Evans, D.SC., F.R.C.S., President

という訳であるが、槇さんがサインなしで承諾状を出してしまったこととかこれにまつわるいろいろ面白い話がいくつかある。

マイクからのその後の手紙によると、日本の御両氏の他に今回次のような人々が同じ名誉をうけたそうである。

ビタリ・アバラコフ、エルヴィン・シュナイダー、テンジン・ノルゲー、ダワ・テンジン

なおACの一九七一年度の幹部は次の通り。

会長、A.D.M. Cox, 副会長、W.H. Murray, 委員、F.R. Brooke, C.A. Russell,〔再選〕副会長、C.G. Wylie, 財務、R.R.E. Chorley, 秘書 M.H. Westmacott, 委員、M.F. Baker, D.D. Gray, V. N. Allen, M.W.H. Day, Edward Peck, R. G. Pettigrew, F. A. Wedgewood.

（吉沢一郎）

（4頁より続く）

リエゾンは27歳の少佐で山をやる気充分な偉丈夫です。小生が多分来年はK2へ来ることになると思うと水を向けましたら、その時は是非メンバーに選んで欲しいと、なかなか積極的です。尊敬に値いする素晴しいリエゾンを得て全く幸いでした。

明日チトラルへ向います。今年はこちらも天候が不順のようです。少々そのことが気になりますが、軽い気持ちでやれるだけのことをやって帰国するつもりです。

来年は是非に総隊長になって頂いてK2でもやってみたいと思っております。思っただけでも楽しいではありませんか。

小生は筆不精ですから報告は帰国してから口伝いたします。取急ぎ一筆ご連絡申し上げます。

一九七一・六・三〇

ラワルピンディにて

（吉沢宛）

◇カラコルム便り◇

京都カラコルムクラブ　小山　貢

（マルビティン）

前略、今日（五月二八日）お便り受取りました。ありがとうございます。日本隊の多くの遭難を知り驚いております。

実は私達の隊も五月二四日早朝四時五〇分、C2からC3への荷上げHP四名が、氷瀑の崩壊によるブロック雪崩にまきこまれて、一名は即死、一名午後三時一〇分、息を引取りました。他の二名は軽傷で元気です。

隊の行動を更に続けるか、中止するか検討したのですが、期日の問題、費用の件、補充のHPの件などの問題で中止に決定し、今日二八日C3、C2C1を撤収し、メンバーは全員BCに集結しました。

メンバーの一名は遺体と共にギルギットに行き、保険などの問題にあたっております。

死亡したHPのリーダー、ビダヤット・シャーは私達の遠行参加で一二回目、ディステギール・サール、バツーラ、ナンガ・ルパール壁（四回）、ラカポシ（二回）、チトラル（チアンタール氷河）、デンタル、ヒスパー（西山山岳会）などに参加した優秀なHPでした。

もう一人のアラブカーンもナンガに何回も参加した優秀なHPでした。

事故のあった朝はC3入りする隊員二名も同時に出発する予定でしたが、ホンの少しの時間差でした。

以上、実に簡単に記しました。帰国後お会いしてお話しします。

（吉沢宛）　五月二八日、BCにて。

◇カトマンズから◇

カトマンズでは湯浅道男君の紹介でヒマラヤン・ソサイエティのパラジュリ君の世話になった。

帰ってから直ぐお礼の手紙を出したら間もなく返事が来た。山がすっきりと見える秋に是非来てくれとのことである。私もそうしたいと思う。

理由はわからないが彼は、信州大と愛知教育大の隊を大変褒めている。一五年来登山隊に同行しているが、こんな立派な隊員におつき合いしたのは初めてだった、と褒めちぎっているシェルパもいるとか。大変嬉しい便りである。

これと対照的に、どこの隊かは書いてないが、隊員とシェルパと摑み合いの喧嘩をした登山隊もあるらしい。双方の言い分をきかねば判断は出来ないが、兎に角こういうのはいけません。くわしくはまた。

（吉沢）

マウント・クックに登る

久留米大学外科学教授
脇坂順一（57歳）

（編者注・本稿は原文より多少短かくしてある。殆んど同じものが「岳人」六月号に発表されているからである。）

◇

マウント・クック登頂は以前からの夢であった。この山は高さ三七六三m ニュージーランドの最高峰であると共に難峰として著明であり、また、かのエドマンド・ヒラリー卿の若い頃からのトレイニングの場でもあったと聞くにつけ、一度は登頂してみたいと思っていた。

この山は原住民のマオリ族の言葉では「アオランギ（雲を突きぬけている峰と云う意味）」と呼び、ヒマラヤと極地を除いては最大と云われるタズマン氷河（長さ約三〇キロ）の西側の略々中央に聳える雄峰である。

さて、日本人で最初にこの山に登頂したのは西山会の伊藤、梶野等（一九六四年一二月二六日）で、いずれも二〇歳代のクライマーである。この時は四人のメンバーであったが、他の二人（共に三二歳）は何故かスノーキャップ直下までで引き返している。西山会の前にも明大山岳部など二つの登山隊がこの山に挑んだが何れも失敗に帰している。

その後、翌年一二月二三日には長野県山岳連盟の清水、知久平パーティ、翌日には志川、丸山パーティが三回目のアタックで成功しているがそれぞれ山小屋からの往復に二〇時間乃至二四時間を要している。

次いで、翌一九六六年一二月には愛知県岳連や新貝勲氏を隊長とする福岡登高会のメンバーが好天に恵まれて登頂に成功した。その際、福岡登高会の柳原、水崎は西稜を登りマウント・クックの三峰（ローピーク、ミドルピーク、ハイピーク）の縦走（地元ではこれをグランドトラヴァースと称している）に日本人として初めて成功し、輝かしい記録を打ちたてた。

その後今日まで日本からの数隊が登頂に成功しているが、それらの記録を読むたびにこの山の厳しさを痛感せしめられ、大正二年三月生れ、五七歳の初老の身で果たして登頂出来るかどうか、些か危惧の念を抱いていたのであった。特にこの山の難所と云われる、頂上直下三〇〇mに及ぶ傾斜四五—六〇度の氷壁、いわゆるスノーキャップの登攀や、その直下に切り落ちている更に急峻な岩壁の登攀のことを思うと些か逡巡し一時は諦めかけたこともあった。しかし一方、何とか登頂しようと云う執念もあり、かねてその機会を狙っていたのである。

私は機会を得て昨年末、香港、シドニー、クライストチャーチを経由して一二月二六日一〇時に根拠地ハーミテイジに到着。早速かねて連絡ずみの地元のクライマー、リン・クロフォード君と共に、二七日朝にはタズマン氷河の一番奥まで飛び、まず手始めにホックステッタードーム（二八一一m）、アイルマー（二六八八m）に登頂し、タズマンサドル小屋に一泊、翌二八日にはエリード・ビューモント（三一〇九m）に登頂した。

それからマウント・クック登頂のため二九日朝、空路ハーミテイジへ引返した。そして食糧を買入れたりしてその日の午後五時ハーミテイジ空港を出発、グランド・プラトーまで飛んだ。飛行時間は僅か一五分だが、歩けばやはり丸一日がかりである。夕刻、近くのプラトー小屋へ着いたが、小屋にはすでに一〇数名の登山者が来ており各自炊事に忙しい。遅く着いた我々は順番を待って炊さん。ニュージーランドの山小屋は食糧さえ持参すれば炊事道具や食器類は全部揃っている。一定数のベッドにはマットやシュラーフザックも整備してあり、食卓や椅子もあって実に心にくいほどである。

今日（一二月三〇日）も晴天に間違いなし。二七日以来四日間も晴天に恵まれるとは本当に運がよかったと思う。クロフォード君は三〇分も前に起きて紅茶やトーストの準備をしてくれていた。他のパーティ（三組）も皆無言のまま支度に忙しい。簡単な朝食をすませ、必要なもの（カメラ、ヤッケ）以外はリュックザックにつめて一纏めにして小屋に置き、午前一時一五分山小屋をあとにした。

リンダ氷河のクレバスの多いのに一驚する。早朝なので雪は引きしまっていてアイゼンがよくきく。リンダ氷河を大きく迂回して行く中に次第に夜が明けて来る。午前四時半にはいよいよトラバースにかかる。かなりの急斜面クロフォード君とお互にピッケルで確保しながら、尺取り虫のように少しずつ登って行く。すばらしい朝焼けだが写真どころではない。大小多数のクレバスに悩まされつつ慎重に登る。五時半にはやっとトラバースを終え岩壁の下で小休止。レモンジュースに咽喉を潤す。

六時にここを出発。これからが難所中の難所。アイゼンを付けているので岩壁は登り難い。そこで岩の間の氷雪の急斜面（四五—七〇度）を登ることにする。蒼氷でステップは切るのは一苦労である。アイスハーケンを何度か用いる。クロフォード君も慎重そのもの。尺取り虫式の登攀を何度も繰返しているうちにさしもの氷の岩壁もやっと登り終えた。時に八時三五分。高さにして約一五〇mの岩や氷の急斜面であるが二時間半余りかかったことになる。

さあこれから頂上までが約三〇〇mの氷雪の斜面（四五—六〇度）、いわゆるマウント・クックのスノーキャップである。深さ約一〇センチの雪の下はカチカチの蒼氷である。危険な登攀は開始された。ここまで来た以上引き返すわけには行かぬ。一歩一歩が緊張そのものである。

クロフォード君が一ピッチ登って確保してくれるのを確かめて、こちらも慎重に登る。彼が登る間はこちらが確保する。これを繰返し繰返し重ねて行く中に頂上が次第に近づいて来た。最後の一ピッチはクロフォード君がトップを私に譲ってくれる。彼の好意的な配慮を心から嬉しく思った。九時四五分遂にマウント・クックの頂上を極めてクロフォード君と固い握手を交わす。かねての念願が達せられた喜びはすばらしい。かつてマッターホルンに初めて登頂した時の感激に相通ずるものがあった。

頂上からの眺めの何とすばらしいことよ!! クロフォード君はシドニーの橋があちらに見えると指をさして冗談を云う。そうかと思うと少し右を指して「おお日本が見える」とジョークをとばす。水筒のレモンジュースで咽喉を潤し、サンドイッチをほうばる。チョコレートもある。レーズンもある。何でも美味しい。

思えば我々は実に天候に恵まれた。一二月二七日に山に入ってから晴天続きであった。我々よりも一ヵ月前にニュージーランドに着いていたにもかかわらず悪天候のため遂にマウント・クックに登頂し得なかった徳島山友会の人達にすまない気がした。

写真も心ゆくまで撮ったので一〇時二五分下山にかかる。今度は私が先に下りる番である。新たにステップを切らねばならぬ個所も沢山あり、また、蒼氷のためピッケルがよく刺さらぬところもあり、確保も時に心細い思いがした。一一時二五分、ちょうど一時間でスノーキャップを下り終え一休みする。これで一つの難所を通過したことになる。

しかしこれからが更に急斜面の氷と岩である。二日前に出来た靴擦れの痛みを堪えつつ横向きになって慎重にそしてヒヤヒヤしながら少しずつ下る。一三時五五分、やっとこの急峻な斜面を下り終えて全くホッとした。ここで一休みする。咽喉が渇くのでそばの氷雪をピッケルで叩いて、その塊りを口に入れる。

一二時二〇分トラバース開始。約五〇分でリンダ氷河に取りつく。リンダ氷河の雪面は強い日ざしのため腐っていて、歩く度に膝のあたりまで没し実に歩き難い。おまけに両踵の靴擦れの疼痛がさらにひどくなった。二〇乃至三〇分ごとにあちこちで雷のような轟音を立てて雪崩が起こっている。登りがけには暗いのでよくわからなかったが、リンダ氷河のクレバスの多いのにあらためて驚嘆する。

一六時半、へとへとになってグランド・プラトーの雪原にたどり着く。橇を付けた飛行機がここに着地するのである。とにかく一五時間余にわたる緊張の連続であった。間もなく約束通り飛行機が迎えに来て約一五分でハーミテージへ帰着した。

日本山嶽志復刻版発売中 高頭式著 別冊解説付き、頒価四五〇〇円、送料二〇〇円、希望者はルームまで。

会員通信

ロッキーから

今井雄二

一カ月半の予定でカナデイアン・ロッキーへやってきました。バンクーバーではカナダ山岳会のミス・スミス支部長の家に招かれて、そこでマウント・ウオデイントンで有名なマンディ夫人やドクター・ノエル・カーターほか数人の人たちに会いました。前回会ったことのある人たちです。カーター氏は槇さんや三田さんと旧知の間柄だというので非常になつかしそうにいろいろ話していました。

まずレーク・オハラへはいりましたが、ことしは例年になく天候異変で残雪が多く、それだけに山容はすばらしく感動しました。ここは十以上の高峰がまわりに迫っていて、こんなところで一カ月ぐらい山登りを楽しめたらと思いました。あいにく私たちは天候に恵まれず、晴れたのは一日だけで、深雪を踏んで二つばかり峠歩きをしただけでした。雷雨、降雨などロッキーとしては珍しい悪天候にあいました。

ここには山岳会の山小舎があって五日間滞在の後このバンフへやってきました。バンフには山岳会の本部になっているクラブ・ハウスがあって、そこに泊っています。四年前ここに泊ったときには、皆んたでいっしょに食卓を囲んだり、広間で歓談したり、クラブの楽しい雰囲気が味わえましたが、今回は自炊でシュラークザック持参というように変わってしまいました。このクラブハウスは実に立派なものでうらやましい限りでしたが、ことし限りで取り払われてしまうとのことです。

ここでは山岳会員のミセス・ディーンとモーリス・ジョネ氏があちこち案内してくれています。一昨日はセルカーク山系のブガボーまで往復十三時間のドライブをしましたが、熊やムースエルクなどの大鹿や小鹿、山アラシなどの野生動物に会いました。

あすはマリーン・レークへ行く予定です。（六月二十八日、バンフにて）

今西錦司氏浅草岳に

越後支部　市村貞夫

昨年六月に今西錦司博士が日本山岳会越後支部長藤島玄氏の招きで、飯豊連峰を縦走されましたが（六〇〇回記念登山）こんどは会津の一等三角点十五峰全山登頂五ヵ年計画の二期目に当り、新潟県と福島県境に位置する南会津の名山今なお豊富な大雪田を持つ浅草岳（一等三角点）を藤島玄越後支部長と詳細な連絡をとり、新潟県側より「守門岳」を経由して小雨の降りしきる中午前十時本峰山頂に足跡を残され計画は成りました。

あいにくの雨にもかかわらず元気な顔をお見せになりました。山頂では恒例の万歳三唱をしたあと、山頂より広がる大雪田を快調に下る。時折り見せる晴間から会津の山々が無限に広がり今西博士も満足の様子でした。雪田で早昼食をとり、沼の平コース分岐点より「ブナ平新道」に入り「山の神杉」へそこより入斗津集落へ出て、そこより会津在住のHK研究家宮森常雄氏が若松より先着されそれと渓稜地域研究会で用意した車二台で一路若松東山温泉を目指して二五二号線に入る。若松到着すると同時に宮森常雄氏宅に立寄られ一休み、その後東山温泉に急ぎ、夜は宮森夫妻歓迎の万歳の式、及び報告会、放談会をやり、酒山菜珍味に舌づつみを打ちながら、山の話やら色々と御教示を受けた。

ここでも終わりは万歳である。翌日は車で史跡「鶴ガ城」を案内し城跡を見て頂く。先生は会津を離れる前に計画を縮めて会津の一等三角点を全山登頂すると意欲あるところをお見せになった。再度会津入りを約束された。その後会津若松発特急「あいず号」十時三五分発で帰京された。「守門岳」については新潟県山岳協会長室賀輝男氏より報告があると思われますので会津側についてははぶく。

行程は左記の通りです。

六月二日　特急「鳥海」～大白川～現地入

六月三日　現地～守門岳～五味沢

六月四日　五味沢～浅草山～東山温泉

六月五日　東山温泉～鶴ガ城跡見学特急「あいず号」帰京

▽参加者（関西）今西錦司、高木碕男高木女史

（福島県）宮森常雄、宮森万佐夫妻、市村貞夫、豊島洋一、小田辺力男

会務報告

七月理事評議員会

（7日午後6時半本会ルーム）

▽出席者　三田会長、成瀬、吉沢副会長、中屋、山崎、藤井、丹部、中島村井、渡部、坂下、板倉、熊谷、野上各理事、佐藤、金坂、小原、望月各評議員、山下監事

▽議事

・事務局員勤務規定改正の件（中屋）

秋ごろまでに従来の勤務規定を新しく改正したいが、取りあえず、十七条の有給休暇（年間）は従来の十二日を十四日とし、八月は交代で休みをとってもらうことにする。会費の納入率は昨年よりよいが、会費未納者には早く納入するよう働きかけたい。なお向井ビルへ例年通り中元としてビール一ダースを贈りたい。以上了承。

・上高地山荘改築の件（山崎）

六月十一日第一回山荘委員会を開き芸大建築科教授山本学治氏に設計をお願いすることにし、一階三十坪、二階二十坪程度の山荘を現在地に建てることにした。七月三、四両日山崎、林、山本、高山の四名で上高地に行き、設計の下見をし、厚生省レンジャーと再度話し合ってきた。

八月上旬山荘委員会を開き、山本氏の構想を中心に具体案をねり、設計図を作ってもらい、九月上旬厚生省に下見に出し、九月下旬には増築願いを正式に出したい。なお豊科地方事務所、同保健所、安曇村役場へも書類を提出する。費用は自転車振興会などへ当りその見通しがついたところで、会員募金額を決め、募金にかかりたい。総費用はだいたい千五、六百万を見込んでいる。

・学生部の件（熊谷）

現状としては全日本山岳連盟の各ブロックの強化がねらいで、とくに関東ブロックを中心としてやって行きたいが、関東ブロックと現在の学生部とはその動きがほとんど同じになるので本年度の学生部は関東ブロックとして活動したい。また学生部OB会を持つよう研究している。この件了承。

・自然保護の件（板倉）

六月に自然保護委員会を開き、自然荒廃の各種のデータを集めることにした。また自然保護協会の自然保護憲章促進協議会にJACとして加盟したいこの件了承。

▽報告

エベレスト国際隊の件（藤井）

植村、伊藤両隊員は六月十七日帰国し、七月一日九段会館で報告会を開いた。

・婦人懇談会（渡部）

七月十七日ルームでビールパーティを開く。

・山岳および索引の件（中島）

山岳二十六年から六十年までの総索引は本七日やっと出来た。山岳六十五年は原稿の都合で遅れ、八月中旬発行となる。

・図書委員会（野上）

恒例の山岳図書即売交換会を十月二十三日、この一本展を十二月四日年次晩餐会の当日深田久弥展として行ないまた明年二月二十四日山岳図書を語る夕べとして松方三郎氏を囲む会を開くことにした。なお会員木野氏から洋書三十六冊、和書六冊が会に寄贈された。

・会員名簿の件（坂下）

十一月下旬発行を目的に準備を進めており、会員各位の協力をお願いしたい。発行費は予算を上回りそうなのでさらに検討する。佐藤評議員、丹部理事が手伝いを申し出られた。

・会員名儀変更の件（山崎）

大井正一氏が気象庁山岳部代表として団体加入していたが、大井氏の個人加盟とする。

なお佐藤テル評議員は自動車事故のため入院していたが、このほど退院され、元気に理事会に出席、あいさつを述べられた。

図書室便り

昭46・6

図書受入報告

実業之日本社寄贈

(1)高波吾策著『谷川岳ヒゲの大将』昭和46

山と溪谷社寄贈

(1)遠藤二郎著『北壁の四十三日』昭和46

あかね書房寄贈

(1)ガストン・レビュファ著・近藤等訳『マッターホルン―理想の山―』昭和46
誠文堂新光社寄贈
(1)東京山草会編『高山植物と山草百科』(ガーデンライフ別冊) 昭和36
エーデルワイス・クラブ寄贈
(1)エーデルワイス・クラブ編『秘められた山旅』スキージャーナル刊 昭和46
橋本誠二氏寄贈
(1)合衆国営林署・橋本誠二訳『Snow Avalanches(なだれ)』

定期刊行物受入報告

〔部報・会報〕
(1)山村民俗の会『あしなか』No. 127 (46-5)
(2)北海道自然保護協会『会誌』No. 9 (46-3)
(3)兵庫県山岳連盟『兵庫山岳』No. 49 (46-6)
(4)国立公園協会『国立公園』No. 258 (46-3)
(5)京都山岳会『京都山岳』No. 554 (46-6)
(6)東京野歩路会『山嶺』No. 494 (46-7)
(7)日本自然保護協会『自然保護』No. 108 (46-3)
(8)低い山を歩く会『低山』No. 72 (46-6)
(9)登歩渓流会『会報』'71-2,3 (46-5)
(10)『東海支部報』No. 11 (46-3)
(11)横浜山岳会『山』No. 467,468 (46-5,6)
(12)日本登山協会『山と雪』No. 158 (46-6)

〔雑誌〕
(1)『アルプ』No. 161 (46-6)
(2)『アルピニスト』No. 10 (46-4)
(3)『岳人』No. 289 (46-7)
(4)『岩と雪』No. 21 (46-6)
(5)『山と渓谷』No. 394 (46-7)
(6)『創文』No. 97 (46-6)

〔その他〕
(1)岩友会『韓国親善登山遠征報告書』
(2)『毎日グラフ』46-6.3
(3)会津山岳協会『会津の山―県境全山縦走踏査特集'70』
(4)『渦潮』No. 18
(5)『第二回 日本ヒンズー・クシュ会議報告書』
(6)京都市中体連ワンダーフォーゲル委員会『活動記録』
(7)大陸問題研究所『日中問題を考えよう』

Journals Arrived in June 1971

1. "Alpinismus" April, Mai 1971
2. "Appalachia bulletin" Vol. 37 No. 6; May 1971
3. "Der Bergsteiger" 38 Jah. Heft 4, 5; April, Mai 1971
4. "The Canterbury Mountaineer" No. 39 1969-70; Dec. 1970
5. "Mountain" No. 14; March 1971
6. "Österreichischer Alpenverein" 26 Jah. Heft 3/4; März-April 1971
7. "Österreichesche Alpenzeitung" 88 Jah. Floge 1376; März/April 1971
8. "Panorama of Slovakia" 1971-1
9. "Rivista Senderos" No. 146; Febrero 1971

洋書受入報告

Walter Kargel 氏 寄贈
1. "Komm mit-Reisn, Wandern, Erholung in Rumänien" 1971

図書委員会報告

六月九日(水)午後7時(談話室)
近藤、堀内、大橋、伊藤、山崎、横山、荻野、野上
決定事項
一、「図書交換即売会」
日時、十月二十三日(土)
二、「この一本展」
日時、十二月四日(土)
テーマ、深田久弥山岳図書展
三、「山岳図書を語る夕べ」
日時、二月二十四日(木)
テーマ、松方さんを囲んで山岳図書を語る夕べ
四、「図書委員懇親会」
日時、十一月十三日・十四日
場所、奥多摩O・M・Cヒュッテにて

学生部便り

学生部委員会(六月十四日)
▽出席者 山崎安治、宮下秀樹、熊谷義信、神崎忠男、村井葵、帰山毅、平野隆司、学生部役員六名
・学生部と全学岳連の今後の問題
・日山協加盟問題について

関東学生山岳連盟総会(六月十七日)
議題
一、全学岳連四十五年度報告(藤沼)
二、関東学生山岳連盟役員
学生部の役員が関東岳連の役員に移行
三、委員校選出(三校)
役員内で後選
四、今年度方針
・学生部活動一時休み、学生部を含めた他部(例えば青年部)を作る
・学生部の一年間の活動(スケジュール)をそのまま引継ぐ

全日本学生山岳連盟委員会
(日本山岳会ルーム、六月二十五日)
参加校 関東(芝工大、専大、成蹊大)
関西(大阪大、大阪市大)東海(名工大、名大)
委任状校、北海道(1)、東北(1)、関西(1)
四国(1)、中国(1)、九州(1)

全日本学生山岳連盟総会
岸記念体育館(六月二十六日)
議題
一、四十五年度活動及び会計報告
二、四十六年度役員選出
委員長 高野義昭(芝浦工大)
副委員長荒井文隆(専修大)
〃 大宅幸夫(大阪大)
会計 竹沢浩介(成蹊大)
他役員11名
各ブロック委員校選出、十四校
三、四十六年活動方針
・コミュニケーションの徹底
・日山協加盟について
(イ)学生が積極的に活動する。
(ロ)文部省、体育協会にも要望書を提出して働きかける。
(ハ)文部省登山研修会の利用。

指導委員会本年度計画

指導委員会は本年度事業計画を概要次のように決定した。
・冬山登山技術講習会(係松永)
十一月二十日夜出発、二十三日まで富士山五合目お庭小屋で行なう。講習会前二日ほど、従来のものより充実した講議を行なう。内容はおって決める
・講習会用テキスト作成(係中島、小栗、高井、松永)
特に技術問題について参加講師の見解をまとめ、あわせて新しい技術を検討して資料による。
・谷川岳入山規制区域への入山許可(係松永、高井、山崎)
従来通り技術的に危険と思われるもの、特に大学山岳部一、二年生に対しては山岳会として発行を控える。
・雪崩研究会
遭難対策委員会と学生部に移管する
・講師派遣依頼その他
その都度検討処理する。

昭和四十六年度各委員会名簿

・**財務委員会**(委員)藤井、山崎、中島、林(担当理事)中屋
・**指導委員会**(委員長)山崎(委員)金坂、村木、川上、錦織、平野、土肥、芳野、堀川、関口、上田(亮)、大森、長尾、広谷、上田(富)、高井、中島、小栗(担当理事)松永
・**海外連絡委員会**(委員)牧野、近藤鈴木、吉沢、田村、芳野、向、佐藤、関口、小味、丹部、雁部、山本、松本(担当理事)神原
・**図書委員会**(委員長)小林(委員)山崎、大橋、村石、武田、岩淵、荻野伊倉、堀内、浅見、横山、神原、近藤渡辺、伊藤(担当理事)野上
・**学生部指導委員会**(委員長)山崎、(委員)栗林、菅沢、久新、宮代、帰山、今村、長谷川、平野、宮下、神崎村井、田村(担当理事)熊谷
・**婦人懇談会**(委員)村井、川森、小倉、山口、三枝、斎藤、須田、宅間、田部井、関田、岸(担当理事)渡部
・**山岳編集委員会**(委員長)望月(委員)山崎、丹部、野上、原(担当理事)中島
・**エベレスト委員会**(報告書作成等)(委員長)三田(委員)松方、大塚、松田、藤田、松浦、宮下(担当理事)中島
・**山日記編集委員会**(委員)坂本、大貫、水野、吉岡、中村、池戸、鹿野(編集責任者牧野内)
・**会報編集委員会**(委員)吉沢、神崎(担当理事)山崎
・**遭難対策委員会**(委員長)金坂(委員)辰沼、川上、長尾、藤田(担当理事)坂下
・**自然保護委員会**(委員長)島田(委

員）村井、渡辺公、吉阪、織内、川森（担当理事）板倉

・**医療（高所医学）委員会**（委員長）辰沼（委員）住吉、北、田村、中島、長尾、広谷、三方（担当理事）大森

・**山荘対策委員会**（委員）山崎、板倉今井田、村山、高山、塚本、堀内、竹田、熊谷、林、藤井（担当理事）中屋

・**支部連絡**（担当理事）山崎

・**集会委員会**（委員）西丸、村井、川上、平野（真）土肥、関田、中川、広田、古畑、平野（隆）、（担当理事）神崎

行方不明の会員

左記会員宛の郵便物が返送になります。住所ご存知の方はお手数ですが、本会事務局までお知らせ願います。

氏名	前住所
永坂鉄夫	名古屋市
緒方康成	福岡市
山口勝康	横浜市
東一郎	金沢市
橋本篤孝	津市
中村哲彦	帯広市
羽津恭之祐	東京都
三上忠人	福岡市
島村洋一	川崎市
岩瀬時郎	国分寺市
山本照彦	豊中市
田村昭平	三条市
石本昌勝	名古屋市
福井正義	小牧市
篠崎博	川崎市
八尋広治	直方市
境忠一	大牟田市
小島誠孝	矢板市
高橋俊雄	大阪市
高岡周夫	江別市
深谷金之助	福島県
北島正八	大阪市

日高名誉会員にネパール国文化勲章授章

この度、日本ネパール文化協会会長本会名誉会員日高信六郎氏は、ネパール王国、マヘンドラ国王より、万国博ネパール館建設に対する功績と、多年に亘る日ネ協会会長としての日ネ親善に対する協力に対し、同国文化勲章（Order of Prasiddha Prabala Gorkha Dakshin Bāhu, ClassII）を授与されることに決定したと、駐日ネパール王国大使タクール氏より、連絡がありました。お慶び申上げます。

従って今後は、日高名誉会員は、ネパールでは、Shinrokuro Hidaka P.P.G.D.B.，と称されることになります。

ルーム日誌（46年6月）

2日（水）第二七〇回小集会静岡大学山岳会チューレン・ヒマール遠征隊報告会　山本良三

3日（木）理事評議員会

8日（火）第二次RCC六級会

9日（水）図書委員会

10日（木）桜門山岳会

稲門山岳会

海外連絡委員会

11日（金）山荘委員会

12日（土）学生部指導委員会

14日（月）全日本学生山岳連盟委員会

15日（火）第二七一回小集会スケッチ教室I

16日（水）自然保護委員会

17日（木）山荘打合会

全日本学生山岳連盟関東ブロック総会

21日（月）常務理事会

23日（水）指導委員会

桜門山岳会

24日（木）第二次RCC六級会

25日（金）全日本学生山岳連盟全国委員会

婦人懇談会打合会

28日（月）集会委員会

稲門山岳会幹事会

29日（火）スケッチ教室II

30日（水）桜門山岳会

六月中来室者七一五名

●ガーデンライフ別冊

高山植物と山草百科

山草は花を咲かせるだけが本当の楽しみではなく　いかに山草らしく作るか　栽培困難なものをいかに手に入れるかが山草園芸の課題です　本書はかつてなかった多種類の山草を網羅し約580点の写真とわかりやすい図解で解説　巻末には索引がつき　山草百科として好評です

●おもな内容

山草はわが心の友　山草の種類と分布　庭で作る山草　山草をデザインする　ロックガーデンの作り方　山草のふやし方　近ごろふえた実生苗　鉢植えの山草そのほか

●東京山草会編

B5・340頁・定価1,400円発売中

日本のユリ

清水基夫著　●新刊

日本一のユリ学者が30余年にわたって　みずからの足で日本全国を歩いて調査　最新の資料でまとめた　日本ではじめてのユリの決定版　文化史　品種改良　栽培ほか

●B5判・378頁・定価4,500円〒200円

東京・神田錦町1の5 **誠文堂新光社** 振替口座東京6294

会費未納の方は大至急お納め下さい。（東京，千葉，神奈川，埼玉在住会員 3000 円，地方 2500 円です）

代表者変更

一五四五　静岡大学山岳会代表　片山一

山岳索引頒布　山岳二十六年から六十年までの総索引が出来上りました。執筆者別、地域別、追悼、遭難、図書紹介、英文、会務報告、事項別と八項目にわけたくわしいものです。頒価千円（送料、荷造り代二百円）です。部数に制限がありますから至急ルームへお申込み下さい。

あとがき　上高地山荘改築問題もようやく軌道に乗りそうです。今月はちょっと油断していたら原稿不足となりあわてて穴うめ原稿を書きました。会員各位の御寄稿をお願いします。（山）

昭和四十六年八月十日発行
東京都千代田区神田錦町
三―二三　向井ビル
発行所　社団法人　日本山岳会
編集代表　山崎安治
（293）七四四一
振替口座東京四八二九番
東京都港区赤坂一丁目三番六号
印刷所　株式会社　技報堂

茗渓堂＝山の本

東京都千代田区神田駿河台2の1・Tel(291)9442振替東京24723

森林・草原・氷河
加藤泰安著
〈A5判482頁〉定価1,500円

すこし昔の話
初見一雄著
〈四六判400頁〉定価1,200円

遠い山・近い山
望月達夫著
〈B6判334頁〉定価960円

山の古典と共に
大島堅造著
〈四六判280頁〉定価1,500円

雪山・藪山
川崎精雄著
〈A5変型判340頁〉定価1,200円

雪原の足あと
坂本直行著
〈B5判206頁〉定価2,800円

日高を歩き続け、日高を愛する北大山の会の人々が綴る日高山脈の全て。
日高山脈
北大山の会編
〈菊判362頁〉定価2,200円

山　岳
日本山岳会編
〈A5判〉
総索引 1,000円
64年 2,000円
63年 2,200円
62年 2,000円
61年 1,800円
60年 1,500円

国立公園カレンダー
国立公園協会編
〈A5判リング綴り〉定価960円

屋久島・美しい豊かな自然
赤星　昌編
〈B6判202頁〉定価480円

山で唄う歌1集・2集
戸野昭・朝倉宏編
〈A6判126頁〉1集240円・2集280円

山に忘れたパイプ
藤島敏男著
〈菊判584頁〉定価2,500円

日本の山旅
足立源一郎スケッチ帖
〈A変型208頁〉定価3,600円

アンナプルナ日記
京都大学学士山岳会編
〈A12取変型判170頁〉定価1,200円

登頂ゴジュンバ・カン
高橋　進編
〈A5判350頁〉定価900円

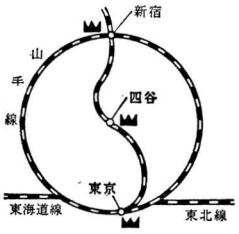
キンヤンキッシュ1965
東京大学カラコルム遠征隊編
〈B5変型判220頁〉定価3,000円

南極新聞1956～7年
南極研究会編
〈B5判横トジ〉定価600円

登山・スキー用具専門店
山の店
大阪市北区梅ケ枝町101
TEL. 06(362)5736

●買い易い 山の店
●北へ来たら 山の店
●フレッシュな 山の店

山とスキーの専門店
片桐
東京都文京区湯島3丁目38－9
片桐盛之助
電話 東京(831) 1794・6680番



四谷店　東京都新宿区三栄町三番地
TEL (351) 7432・1912
八重洲口店　東京都中央区八重洲二の五
TEL (271) 1560・8575
新宿店　新宿ステーションビル四階
サービスショップ
TEL (352) 6564
日本信販加盟店

山友社 たかはし

登山とスキー具
イワタ
東京都中央区日本橋通2－1
PHON; 271－7686・1718

登山用具の専門店
好日山荘
東京店・中央区銀座2－4－5 (561)3600・(567)9031
東京店・中央区銀座2－4－4 (561)0966 スキー店
大阪店・北区曽根崎上一丁目47 (364) 0933 (代)
福岡店・須崎町1－4 (28) 3440